

目次

事業地と受益者

今期の中心課題

I. マンニャン人間開発センター

1. 就学促進事業

2. 保健衛生事業

3. 農村開発事業

4. マンニャン協同組合事業

II. 国内事業

事業地と受益者

事業地と受益者はこれまでとほぼ同様である。

表 1. 事業別優先地域

事業内容	優先地域及び人	準優先地域及び人	受益者数（見込み）
就学促進事業	カラミンタオ村、アムナイ川流域集落6村（パクパク、マカトリオ、カンルアン、マンガハン、カマンブガン、バヤバサン）	サンタクルス町に住むマンニャン族	210名～
保健衛生事業	アムナイ川流域集落	サンタクルス町に住むマンニャン族	1000名
農村開発事業	アムナイ川流域集落6村（パクパク、マカトリオ、カンルアン、マンガハン、カマンブガン、バヤバサン）	サンタクルス町農家	120世帯～
協同組合事業	MAIT 協同組合メンバー		88名

なお、協会の支援により教育を受けたマンニャン族子女が、協会のボランティアとして各種事業の運営に関わっていることから、マンニャン族は受益者でもあると同時に支援者でもある。今年度は更に、支援者としてのマンニャン共同組合の組織強化に注力する。

今期の中心課題

- 協同組合経営力の強化
- アムナイ川流域住民への協同組合参加意識の啓発と協同組合員数の増加
- 協同組合による就学促進事業試験的運営の継続
- パーマカルチャーによる就学促進事業用食費住民負担の増加

I. マンニャン人間開発センター

1. 就学促進事業

協会では設立以降一貫して就学促進事業を行ってきたが、教育を通じた人材育成はコミュニティ開発の礎にもなるとの考えから、今年度も継続して以下を行う。

1) 学校教育（奨学金事業）

物理的にも経済的にも学校に通うことが困難な子どもたちに学校教育の機会を提供するため、希望者を奨学生として募り支援しているが、事業始まって以来初の快挙である、当協会奨学生の有名大学進学は、マンニャン社会に大きな希望を与えるものとして期待されている。加えて昨年度から導入した、協同組合によるカラミンタオ村の奨学生の管理とサポート（奨学生の選抜、日々の指導、資金繰り、食糧の調達等）について、引き続き協会ボランティアスタッフと協力して行う。また、中途退学を防ぎ、子どもたちの学習へのモチベーションを維持するために、断絶しがちな山の生活と町の学校生活に関連性を持たせることは重要であり、子どもたちに早い時期から協同組合の活動に触れさせる意義は大きい。一般的に共同体としての意識が希薄であるとされるマンニャン族において、幼少の頃からコミュニティ意識を根付かせるきっかけとなりうる点からも、共同で敷地内での園芸や組合菜園での農作業等を行うことは重要である。

表 2. 奨学生数（見込み）と学費予算内訳

	小学校		ハイスクール		大学		計	
	名	円	名	円	名	円	名	円
イラヤ	0	0	36	360,000	5	500,000	41	860,000
アラガン	25	375,000	5	100,000	0	0	30	475,000
合計 (名)	25	375,000	41	460,000	5	500,000	71	1,335,000

*イラヤハイスクール生の経費は協会と協同組合で折半。

2) 識字教室

現在 5 村のマンニャン集落で識字教室を開催しているが、各集落に赴任したボランティアスタッフの孤立によるモチベーションの低下を防ぎ、質の高い授業を提供するためにも、スタッフ間で定期的に各識字教室を訪問しあい、ピア・エバリュエーションによるモニタリングを行う必要がある。具体的には、児童の識字教室への出席率や授業内容と環境設備の確認、住民へのインタビュー等も行うことで、問題点等を共有し、それぞれの学びを通して、よりよい識字教室運営に結び付けていく。

なお昨年度計画していたものの、活動が停滞していた「参加型教科書」の運用は、今年度においても余力があれば続けていくものとする。

3) 学生寮の運営

学生寮の運営も、協会の大きな活動の一つである。常時、65 名程度の小学生及びハイスクール生が町の学生寮で共同生活を営んでいるが、彼らの親代わりとして生活に必要な日用品の購入や住環境の整備、特に三食の用意は欠かせない。元々マンニャンの子どもたちは多くが慢性的な栄養失調で病気がちであるため、最低限健康な体を維持するためにも給食の提供は必須である。しかしながら、これまで実験農場でお米や野菜を生産し食材としてあてたり、両親のいる村から食材の供給も少なからずあったが、必要な食材の半分も賄えておらず、相変わらず給食にかかる経費は大きいのが悩みの種である。今後本事業を協同組合が運営していくためにも、組合名義で借り入れた水田の収穫高の向上、親から現金や農作物の提供、組合販売店の利益の拠出等を促し、全体として約 3 割自己負担を引き続き目指したい。

表 3. 給食費予算（学生寮におけるボランティアスタッフ含む）

	人数	月間(1人あたり)	月数	計 (ペソ)	計 (円)
サンタクルス寮(就学時)	76	840	10	638,400	1,576,848
サンタクルス寮(休暇時)	10	1,000	2	20,000	49,400
大学	5	3,600	11	198,000	489,060
合計					2,115,308
協会負担 (7割)					1,480,716

2. 保健衛生事業

1) 保健互助制度

ローランダーとの意思疎通が困難なマンニャン族患者への医療機関での問診補助、結核などの長期治療が必要な患者へのモニタリングといった医療へのアクセス支援はかなりの完成度に達しておりルーチンとして定着した。住民からのニーズが高まる一方で、昨年に引き続き資金の捻出が大きな課題である。協同組合の食糧生産増加による栄養改善と、農作物や手工芸品による現金収入源の増加、保健互助制度の運用による一種の健

康保険事業を行うなど健康のために総合的な取り組みを継続的に行う。

保険互助組合

集落ごとに組織された保健互助会（協同組合活動の一部）が会費というかたちで毎月保険金を徴収し、プールした積立金を会員の疾病時に活用する一種の健康保険制度である。これまで医療費は協会が援助してきたがこの制度により住民による自立を促していく。

ベビーウォッチ

極端に多い乳幼児の死亡を、コミュニティ意識を高め、コミュニティ全体で見守っていくことによって削減していこうというのがこの取り組みのねらいである。だがコミュニティ意識は簡単には育たず、現状としては村の駐在スタッフが活動の大部分を担っており大きな負担となってきた。本年度は住民の主体性を高め、住民の中のサブ保健指導員と活動を分担する。

3. 農村開発事業

1) パーマカルチャー事業

有機農業による野菜栽培は、既に各集落にある協同組合のパイロット菜園で行われており、昨年度より継続して派遣している有機農業指導員の監督のもと実施する。なお、今年度もアジア学院の農場主任、荒川治氏を専門家として迎え、ボランティアスタッフ及び協同組合のメンバーらに有機農業の技術指導を行ってもらい、安全な食料増産につなげたい。加えて、昨年サンタクルス町の農民向けに行った拡大農業講習会が好評を博したこともあり、対象者をマンニャン族のみに限定することなく、可能な範囲で地域における有機農業の普及に結び付けたい。

また、収穫した野菜の一部はサンタクルス町営市場に設けられた共同組合の簡易販売所で販売されており、現金収入の向上にも繋げる狙いである。

4. マンニャン協同組合事業

1) 就学促進事業への組合の関与

経済的に他村よりも進んでいるイラヤ部族のカラミンタオ村では協会の学生寮から通学する子どもたち(全学生の約半数)の学費、食費等の経費を親と組合で段階的に全額負担することを目指す。親から現金の拠出、組合菜園、水田での食料生産、組合販売店の利益から昨年度の終わりには経費の半分以上を拠出できるようになった。本年度は70%の拠出と継続を目指す。

2) 保健衛生事業への組合の関与

年々増加する医療費をマンニャン族自身で負担していくため、保健互助会積立金を継続して行う。医療に対するニーズが高い一方で、医療費の大部分を協会に依存してきたが事業に持続性を持たせるためには自己負担できるようにしていく必要がある。医療へのニーズを動機付けとし、地域住民が協力し合って医療費をプールするかたちで補填し合うことで、元来希薄な住民同士で互助、協力する意識を育成する一助とする。また、すでにすべての事業地で会費徴収を開始しているものの、基本的に現金収入を得ないマンニャン族は継続的な会費納入が困難なのが現状である。制度の継続的な運営のため昨年度途中より協同組合販売店での商品購入額の一部を保健互助会積立金へ還元するポイントカードを導入、これを本年度も継続していくと共に、協同組合への参加意識を高めていく。

3) 販売所運営

既存のサンタクルス町営市場組合販売ブース、カラミンタオ村設置の販売所、各仮説販売所の継続的な運営を行い、商品管理や売買の基本を学んだ人材を増やす。

4) 販売商品の開発

タロ、バナナ、生姜などの継続的な販売や、各集落にある協同組合パイロット有機菜園の野菜の収量、販売量を増やしていく。また、ヤギの乳製品、ラタン、蜂蜜の商品開発を実験的に行っていく。

5) MAIT ブランドの確立

マンニャン製品が思いの外一般フィリピン人に評判がいいことから、昨年度より MAIT ブランドを作り上げて、付加価値をつけようということになった。まずは「付加価値」ということの意味を勉強し、どうすれば MAIT がブランドとして定着するかについて話し合いをし、ロゴを作る、歌を作曲する、ロコミなど工夫をはじめている。本年度は具体的な形としてブランドのロゴ、歌の完成を目指す。

6) マンニャン文化センターの運営

マンニャン人間開発センターの一角に民芸品や開発商品の展示コーナーを作る。また、組合活動の情報を現地スタッフによるブログで配信していく。

7) エコビレッジのデザイン

昨年度着手できなかったのがこのデザインである。本年度はパイロット地域としてカンプガン村、カンルアン村を選択しエコビレッジのモデルを机上で構想し、実際に村に実現させていく。識字ステーション駐在スタッフをファシリテーターとして PRA(Participatory Rural Appraisal)などの住民参加型手法をフルに利用する。

8) イベントの開催

これまでスポーツの祭典、収穫祭などのイベントを地域で行ってきたがコミュニティ意識や同胞意識を高めるには非常に有効であった。本年度も昨年度に引き続き四半期ごとの催し物を企画、開催する。

9) 森の育成

集落ごとのコミュニティに一種の入会地となる森の造成予定地を検討中、苗木は準備された。本年度は森の造成予定地を最終決定し、植林作業を開始する。

10) 各種職業訓練

今期の訓練の内容は以下の通りである。

訓練項目	目的と内容	参加者
大工/木工訓練	パーマカルチャーデザインによる造園など	男子ボランティア 3名
パーマカルチャー	協会実験農場、識字ステーションでの食糧増産を目標に	男女ボランティア 10名
合鴨農法	協会実験農場での収量増加と事業地での普及を図る	男子ボランティア 5名 アムナイ川流域住民 80名
洋裁	<ul style="list-style-type: none">● ミシンを使った簡単な衣服の製作● MAIT への商品開発● グローバルフェスタ（日本）用お弁当カバー、箸袋などの商品開発	女子生徒及びボランティア 8名
調理	パンや各種料理の製作、研究	女子生徒及びボランティア 10名

II. 国内事業

本年度はこれまで 21 世紀協会の悩みであった慢性的な人手不足を解消するために、協会事業を理解し広めるためのイベントや、直接現地に赴き事業を体験したりマンニャン族の文化やフィリピンの文化を体感したりするためのスタディツアーの企画を練るなど、多くの人が関わられるような活発で充実した活動を実施する。

1) グローバルフェスタへの参加

グローバルフェスタとは、国際協力活動を行っている政府機関、NGO、企業などが一堂に会する国内最大の国際協力イベントである。21世紀協会も例年ブースやワークショップを提供してきたが、本年度もこれに参加し、現地職業訓練での製作物の販売や、植樹の寄付を募るマイツリー企画を行う。

2) 活動報告会の開催

現地事務局長川畠の帰国の際に報告会を開催し、リアルタイムの現地の現状を報告する。また、理事長池田ほか国内スタッフが現地へ訪問した際には都合のつく限りより多くの支援者へ共通理解を図るために現地報告会を実施したい。

3) 各種交流会の開催

21世紀協会にはNGOが持つノウハウとして、活動20年以上の歴史と、カウンターパートを持たず日本人スタッフが直接的に関わって支援してきたという実績がある。また人の手がなかなか届かない所へ援助するという地理的な現場らしさという点においては他のどの団体よりも秀でているということができるだろう。これらのノウハウを活かし、バックグラウンドの違う文化とはどういったものなのか等を伝える開発教育を中心とした交流会や、熱帯地方での有機農業・パーマカルチャー実践を共有する交流会等、21世紀協会独自の情報を発信し、また交換するための交流会を実施する。

4) スタディツアーの企画

日本にいながらにして異国へ当事者意識を持つのはかなりの想像力を要する。だが、現地へ訪問すれば百聞は一見に如かずで、現地の状況を目で見て、また肌で感じ取ることができるのではないだろうか。本年度は引率者の都合上開催は未定だが、他団体のスタディツアーと差別化を図るため情報収集をしながらツアーの詳細を構成する。